
芝生と露伴

しん太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

芝生と露伴

【Nコード】

N1304F

【作者名】

しん太

【あらすじ】

僕は夢岸^{ゆめぎしうはん}という男の立てた白塗りで木造の巨大な三階建ての庭に生息している芝生だ。僕はいつも露伴を見ている。

(前書き)

宜しく願います。

僕は芝生だ。夢岸露伴ゆめぎし るはんという男が立てた一軒の巨大な白塗りで木造の三階建ての家の庭に生息している者だ。芝生といっても、小さな草一本一本が密集して一つの庭の芝生を成しているわけだが、僕の場合、一本の草ではなくて、庭全体に植えられている芝生全体として、僕の意識が一つある。僕が生まれたのは露伴がこの巨大な家を建てた時だ。露伴が自分の家の庭の土地に芝生（僕）を植えた時だ。もちろん、僕は何かしらの種から芽を出し、ある程度まで育ち、そこで露伴に芝生として売られたのだろう。その時も、僕はもちろん、生きていたのだろう。だが、僕の意識が生まれたのは、露伴の家の庭の芝生、というものが成立してからだ。だから、僕は、露伴から生まれた子供、ということになるのかもしれない。露伴の家の庭の芝生として誕生する前の記憶は、君達が母体での記憶を喪失しているのと同じように、僕にはない。僕が最初に見たのは露伴の顔だ。頬のこけた、色白の、病弱そうな、露伴の顔だ。露伴は僕を見つめて、すがすがしく微笑んでいた。希望、というものに満ち溢れていた。僕にはそう見えた。露伴は、あの時ほど、輝いてはいないが、それなりに日々を生きている。露伴は、時折、僕の上に寝転ぶ。露伴の体は、骨と皮、とまではいかないが、痩せすぎているだろう。露伴が僕の上に寝転ぶ時、僕は露伴の骨の感触を知る。露伴は僕の上で眠る。時には四、五時間も。僕は露伴の呼吸の音を聞く。この家には露伴しか住んでいないが、露伴は、孤独、というよりは、一人が好き、なのだ。露伴は昼下がりには、僕の上に置かれてある白いテーブルと白いイスで、コーヒーを飲みながら、読書をする。長い時は夕暮れ時までそうしているし、時にはテーブルの上に突っ伏して何時間も眠ってしまう。真夜中、露伴の叫び声を聞くことがある。何日も、時には何週間も、場合によっては何ヶ月も、露伴は家から出てこないことがある。露伴の家からは獣の鳴き声が聞こえる。

露伴は真夜中、突然、現れて、僕の上に、何時間も立ち尽くしていることがある。一度、露伴の家に老人の集団が訪ねて来たことがある。露伴は、一度、僕を掘り起こして、棺桶を埋めたことがある。

露伴は、僕の上で犬を殺したことがある。

露伴は、いつも、居留守を使う。露伴は、いつも、近所の子供にからかわれている。露伴は、一度、その子供の一人を本気で殴ったことがある。露伴は、時折、おうおうおうおう、という奇声を上げている。露伴は。露伴は。露伴は。

露伴、君は一体、何をしている人なんだい？

（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
ご感想・ご批評等頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1304f/>

芝生と露伴

2011年1月4日03時13分発行